

2019年度奨励論文

**映画産業における組織内学習**

—監督とプロデューサーの個人知の影響—

青木千夏 経営学科 4年 伊藤誠悟ゼミナール

## ○論文の要旨

本稿は映画産業における組織内学習において、監督とプロデューサーに焦点を当て分析を行った。映画産業は一つの作品において多くの人やお金が動く規模の大きい産業であり、映画製作は組織としての活動を前提としているためその成功要因を明らかにすることで映画産業にとどまらず他の業界や組織にも活用することで組織運営に貢献できるのではないかと考えた。

まず組織内学習とは組織の構成員となる個々の個人学習(個人知)から始まり、構成員の相互作用であるコミュニケーションを経て、組織に蓄積(組織知)されそれが競争優位につながる形へと具現化することで企業の戦略的能力を高めるものである(周,2007)。そこで映画製作組織において個人知の増加は多くの作品ジャンル経験が、そして個人知を組織知へとスムーズに変換するには自らの職種だけでなく他の職種を経験していることではないかと考えた。

映画製作組織には多種多様な職種があるが本稿では監督とプロデューサーの二職種を研究対象とした。映画制作の現場責任者である監督と映画製作組織の責任者であるプロデューサーが最も組織内において大きな役割を担い組織内学習に影響しているのではないかと考えたからである。本稿では2000年から2018年に公開され興行収入が10億円以上の邦画作品453作品を分析した。結果として監督は多くの他職種を経験し、プロデューサーは多くのジャンルを経験した方が高い興行収入を上げることがわかった。以上のことからこのような職種により違いがでたということは組織の成長と発展に個人が帰するためにはさまざまな知識を得ることはマイナスとは言えないが、自らの職種の根本に求められている能力は何か、そのためにどのような経験をすればよいのかを理解してから学習をする方が圧倒的に組織内学習に繋がるという結果を本稿では得ることができた。